



# 戦後前衛書に見る書のパダニズム：「日本近代美術」を周縁から問い直す

向井, 晃子

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2019-03-25

(Date of Publication)

2027-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7368号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007368>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式3)

## 論文要旨

氏名 向井 晃子

専攻 グローバル文化専攻

指導教員氏名 池上 裕子 准教授

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)

戦後前衛書に見る書のモダニズム：「日本近代美術」を周縁から問い直す

### 論文要旨

本研究は、第二次大戦後に隆盛に向かい国内外の美術家からも興味をもたれた「前衛書」を主題に、それを試みた書家たちの活動を「書のモダニズム」として検証する。日本では、明治政府が西欧から美術制度を移入するにあたり、「書画」という概念を「書」と「絵画」に分離する「書画分離」を行ったため、「美術」から除外された「書」は、芸術分野として不明瞭な立場へと陥った。本稿は、美術制度構築の過程で周縁化された書という分野に生まれた新たな試みである「前衛書」を歴史的に位置づけて検証することで、「日本近代美術」という制度を問い直すものである。本研究では、「書のモダニズム」を「書のメディアム」としての特性を重視し、文字の可読性と意味性に拘らず、過去の規範を検証した上で、同時代の社会に相応しい書の表現を新たに開く動き」と定義する。日本の近代における社会と美術との関係には西欧とは異なる事情があるため、本稿での検討は欧米の美術におけるモダニズム理解を引き写すのではなく、両者の歴史的背景の差異を踏まえた上で、近代化する社会の中で書という芸術に起きた変化に目を向ける方針をとる。「前衛書」は書壇の中では主流にならず、美術から周縁化された書の中でもさらに傍流とされた。本稿では、昭和初期に上田桑鳩が出した「現代の書」の宣言に「前衛書」の萌芽を見て1960年代までを検討範囲とし、そこで見られる書の革新的な試みを指す用語として「前衛書」を使用する。そして、前衛書を試みた作家の中から美術界と積極的に関わりを持った上田桑鳩、森田子龍、井上有一、篠田桃紅を取り上げる。

第1章で見る上田は、先駆的に書を芸術として考え、同時代の書の必要性を訴えた。1933年の「現代の書」の宣言は、社会の変化に応じて書を問い直したものである。上田は、書の要点は生活の中で生じる感懐を表す抽象性にあると考え、制作面では書を造形的にとらえた。書を美術の一部門だと考えた上田の美術観と革新的な書の制作は、明治期の美術の分類を問い直すものだったが、

書壇の主流からは疎外され、その周縁で活動した。

第2章で論じた森田は作家だけでなく、雑誌編集者、書の理論家の一面を持つ。ここでは、彼の活動を戦後の「書画再分離」という観点から検討した。森田は雑誌を通じて戦後の書と美術の交流を拓き、そこでは書と美術の分類の再考もなされた。制作では、時間性を視覚化する新たな素材の研究が行われ、作品化されたことが明らかになった。この革新的な制作は、1962年に森田が禅の思想を背景とした書論を確立した後も行われたことから、1960年代の森田には、非西洋的な書論と科学的な素材の研究が併存したことが判明した。1950年代の書と美術を巡る検証や、美術制度の実力者である国立近代美術館次長の今泉篤男が書に「純血」を求めた戦後の「書画再分離」を示す発言の後、森田が禅の思想を援用した書論を確立し、時間性を視覚化する革新的な制作を行ったことは、西欧を起源とする美術とは異なる表現を理論と制作の両面から打ち立てようとした挑戦だったのだ。森田が重視した時間性は、毛筆を用いた身体操作により、日本文化にある身体性と精神性が連携する思考を視覚化した表現だった。

第3章では井上の制作を、技巧を志向しない「脱技術」をキーワードに論じた。この「脱技術」は近代に「手習い」を場として成立した書の問い直しである。デビュー作から井上の「脱技術」は見られ、それは様々な探究や検証を経てもなお維持された。画家の長谷川三郎との親密な交流や、ゲンビでの書と美術を巡る検証、油彩やエナメルを使用した非文字の制作を経て、井上は大きな紙に大きな文字を書く「有一スタイル」を確立した後も井上は素材の研究を続け、墨の凝固点を応用した凍墨を用いた後、ボンドとカーボンを混ぜたボンド墨を使用して「脱技術」が見られる制作を続けた。それは、同時代の素材を用いて書を一般社会へと開く試みとなっている。

第4章で論じた篠田は、渡米をきっかけに書壇から離れて、美術の場へと展開した。初期の作品から水墨の手法が見られ、「書」に「画」の手法を持ち込んだ制作は「書画一致」を新たな形で取り戻している。帰国後は、墨を用いた平面作品を発表すると共に、建築との協働や装丁への書き文字提供、エッセイ執筆など、多方面へと展開した。ただこれらは、毛筆を日常的に使用していた時代の基準に照らすと、全て筆と墨に関わる仕事でもあり、篠田の活動は自らの文化的背景と伝統的な美意識を礎に展開した革新的な試みと見ることが出来る。

これらの作家はそれぞれ革新的な手法で同時代の書を探究する制作を行ったこと、そしてそれは明治期に西欧から美術制度を移入する際になされた「美術」分類の問い直しとして、歴史的に位置づけられる。そしてこれら四人の作家は共通の活動基盤を持ち得なかったという事実は、同時代の美を探究していた彼らの表現活動が、欧米の美術をする日本の美術界での戦後の「書画再分離」によって日本の「美術」からは除外されたことを示している。そもそも、明治期に「美術」制度は、実利的な目的で導入された。その近代的なシステムの運用にあたり制度や権威を検証するのではなく内面化する傾向に、日本の美術制度の硬直化の根源があるのではないだろうか。

グローバル化が進む現在、いかに「美術」や「伝統芸術」を考え、語るのかを検討する上でも、戦後に行われた前衛書の展開と美術との交流は、今なお有益な手掛かりを提供している。

論文審査の結果の要旨

氏名	向井 晃子		
論文題目	戦後前衛書に見る書のモダニズム :「日本近代美術」を周縁から問い直す		
判定	合 格 ・ 不 合 格		
論文チェックソフトによる確認	<input checked="" type="checkbox"/> 確認 <input type="checkbox"/> 未確認 理由:		
審査委員	区分	職名	氏名
	委員長	教授	岩本 和子
	委員	教授	藤野 一夫
	委員	准教授	池上 裕子
	委員	鳥取県立博物館副館長	尾崎 信一郎
委員			印
要 旨			
<p>本審査委員会は、学位申請者向井晃子の博士論文「戦後前衛書に見る書のモダニズム：『日本近代美術』を周縁から問い直す」について、下記の結果を得た。</p> <p>本研究は、第二次大戦後に興隆し、国内外の美術家から注目された「前衛書」を「書のモダニズム」として検証したものである。日本では、明治政府が西欧から美術制度を移入するにあたり「書画」という概念を「書」と「絵画」に分離する「書画分離」を行ったため、「書」は芸術分野として不明瞭な立場へと陥った。さらに「前衛書」は書壇の中でも保守派の理解を得られず、傍流となった。本論文は、昭和初期に上田桑鳩が出した「現代の書」の宣言に「前衛書」の萌芽を見て1960年代までを検討範囲とし、前衛書家の中でも美術界と積極的に関わりを持った上田桑鳩、森田子龍、井上有一、篠田桃紅の活動と受容について考察した。本論文の意義は、美術制度構築の過程で周縁化された書に生まれた革新的な試みである「前衛書」を歴史的に位置づけ、検証することで「日本近代美術」という制度そのものを問い直すことにある。本委員会は、本論文はそれぞれの作家について新知見を交えた有意義な考察を提示したことに加え、制度批判研究としても大きな成果を挙げたと判断する。</p>			

以下、各章ごとに本論文の論述とその成果について記していく。

本論文では、序章で書のモダニズムの定義を行い、明治以降の近代化する社会において書の社会的位置づけが変容したことを論じた。続く第1章で考察された上田桑鳩は、先駆的に書を芸術として考え、同時代にふさわしい書の必要性を唱えて1933年に「現代の書」宣言を行った。書を美術の一部門だと考えた上田の美術観と革新的な書の制作はについて論じた本章は、上田の活動が明治期に設定された美術の分類を問い直すものだったことを明らかにし、上田が後続の世代に与えた影響についても論じた点で重要な論考である。

第2章では、作家、雑誌編集者、書の理論家として多様な活動を行った森田子龍を戦後の「書画再分離」という観点から検討した。森田は雑誌を通じて書家と美術家の交流を促進し、書の海外展にも尽力したが、国立近代美術館の今泉篤男が書に「純血」を求めるなど、書と美術はそれ以上交わることがなかった。本章は、当時すでに美術制度が硬直化しており、その中で行われた書と美術による交流の限界を明らかにした点が大きな成果である。また、森田が禅思想を援用した書論を確立し、時間性を視覚化する制作を行ったことについても、身体性と精神性が連携する思考を視覚化した革新的な表現として論じており、先行研究にはない論点を示している。

第3章で検討された井上有一については、その制作を「脱技術」という概念をキーワードに論じている。「脱技術」とは近代美術における確立した技術や技巧をあえて崩す手法のことで、井上の場合「手習い」を場として成立した明治以降の書のあり方を問い直したものと考えられる。画家の長谷川三郎との親密な交流や、ゲンビでの書と美術を巡る検証、油彩やエナメルを使用した非文字の制作を経て、井上は大きな紙に大きな文字を書く「有一スタイル」を確立するに至るが、その制作姿勢には一貫して「脱技術」の姿勢が見られることを論じ、作家論として大きな成果を挙げている。

第4章で扱った篠田桃紅の制作には、初期の作品から水墨の手法が見られるため、本章は「書」に「画」の手法を持ち込んだ「書画一致」をキーワードとして考察した。渡米をきっかけに書壇から離れ美術へと活動の場を移した篠田は、墨を用いた平面作品を発表すると共に、建築との協働や装丁への書き文字提供、エッセイ執筆など、多方面で活躍した。ただこれらは、毛筆を日常的に使用していた時代の基準に照らすと、全て筆と墨に関わる仕事でもある。本章は、こうした篠田の活動は伝統的な美意識を礎に展開した革新的な試みであり、また既存の制度的境界を無効化するものであると論じた点に重要性がある。

結びとして本研究は、これら四人の作家がそれぞれ革新的な手法で同時代の書を探究する制作を行ったこと、そしてそれは明治期に西欧から美術制度を移入する際になされた「美術」分類の問い直しとして歴史的に位置づけられることを明らかにした。だが、彼らが共通の活動基盤を持ち得なかったという事実は、硬直化した日本の美術制度の中で「書」が再び除外されていたことを示している。そもそも美術制度は明治期には実利的な目的で導入されたものだが、そのシステムを戦後に運用していくにあたり、制度や権威を検証するのではなく内面化する傾向が日本にはあった。本論文は、そこに日本の美術制度の硬直化の原因があると結論づけている。

以上、本研究は戦後の前衛書について、その活動と受容を歴史的に考察したものであり、それによって「日本近代美術」という制度とその問題点について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって本委員会は、学位申請者の向井晃子は、博士(学術)の学位を得る資格があると認める。